

論文の和文要旨	
論文題目	英語教授・学習に有効な例文選定の決定要因：その方法論と評価基準
氏名	かわもと なほ 川本 渚凡

本論文は、英語教授・学習に有効な例文の選定・評価基準を実証的に調査することを目的としている。例文は、教科書、文法書、単語帳など、さまざまな言語学習教材で一般的に提供されるが、その例文を評価するための確立された基準は存在していない。辞書学、自然言語処理 (NLP)、コンピュータ支援言語学習 (CALL)、データ駆動型学習 (DDL) などの分野では、これまでも「良い」例文の基準に関する多くの研究が行われてきたが、その多くが、例文難易度決定に寄与する言語的特徴にのみに焦点を当てている。一方で、例文の質を決定する要因は、この言語的特徴以外にも複数存在する。しかし、これまでに例文の質を決定する種々の要因に総合的に焦点をあてた実証研究は、ほとんど存在しない。

本論文ではまず全体の序章の後、第 2 章で辞書学、NLP, CALL, DDL 分野の先行研究のレビューを通し、例文選定の条件や例文使用の効果に寄与する変数整理を行った。それらの情報をもとに第 3 章では「例文の使用と評価のモデル」と称して暫定的な枠組みを提案した。このモデル内では、例文選定・使用を評価する要因として、例文が提供する言語的な情報 ([INFORMATION])、その例文を参照するユーザー ([USER])、例文が提供される媒体 ([MEDIUM])、例文が提供される目的 ([PURPOSE]) の関係を相互に位置付けている。これらの要因のほか、例文評価の基準 (CRITERIA) は、USER, MEDIUM, PURPOSE の相互作用で決定され、それが用例の有用度を定めるものであるとしている。例文評価の基準のうち、言語的な特徴を基準言語特性 ([Criterial Linguistic Properties]) と呼び、これは例文が与える情報の種類を定義する INFORMATION とは区別している。INFORMATION は例文がその用途として提示するさまざまな情報であり、基準言語特性は例文の質決定に寄与する言語特性としている。これらの枠組を用いて、全体として以下の 3 つの研究設問を設定した：

RQ1：例文の質・難易度を評価する基準言語特性の性質とは何か

RQ2：例文の基準言語特性はその他の関連要因（目的・ユーザー・媒体）に基づき、いかに重み付けされるか

RQ3：例文は特定の条件下で実際のユーザーにどのように使用されるか

これらの研究設問に答えるべく、本論文では 4 つの実証研究を行い、それらの知見をもとに第 3 章の「例文の使用と評価のモデル」の改訂を第 8 章で試みている。

まず 3 つの実証研究（第 4 章から第 6 章）により、上記の諸要因間の相互関係を調査した。第 4 章では、基準言語特性と例文提供目的の関係 ([Criterial Linguistic Properties] × [PURPOSE])、第 5 章では、基準言語特性と例文が想定している難易度レベルの関係 ([Criterial Linguistic Properties] × [USER])、第 6 章では、基準言語特性に基づき設定された例文が実際の学習者にとってどのように認識されているか ([Criterial Linguistic Properties] × [USER] ↔ [REAL USER])に着目した。これらの結果を踏まえ、第 7 章で

は、前章までに明らかとなった例文の質に寄与する言語的特徴に着目し、統合的に例文使用の観察調査を実施した。

第4章では、例文を提示する媒体としての辞書に着目し、目的別辞書の例文を標本抽出し、それらに特微量として予想される言語特性（文長、句例 vs 文例、語彙レベル等）を例文単位で注釈付けし、例文提供目的（発信用辞書 vs 受信用辞書）を区別する基準言語特性を、統計手法の決定木を用いて探索した。その結果、特に2言語（bilingual）辞典において、例文の形式的特性（句例 vs 文例）が、受信用例文と発信用例文のタイプを弁別するのに最も寄与することが判明した。一方、完全文の用例を提供する傾向の強い1言語（monolingual）辞書では、用例の長さ（例文中に含まれる単語数）が受信用と発信用の例文タイプの決定に寄与していた。これらの2つの要因に加えて、例文の平均語彙レベル、文内に含まれるB1レベルおよびB2レベルの単語の割合等の語彙的特徴も部分的に決定に寄与することがわかった。

第5章では、例文の難易度に寄与する言語特徴を探索するため、CEFRのインベントリー（*Core Inventory, Global Scale of English, English Grammar Profile*）で提示されているレベル別例文を調査対象とし、これらの例文がどのような基準言語特性によって、例文難易度が規定されているかを順序ロジスティック回帰分析を用いて調査した。インベントリーの種類に関わらず一貫して例文の難易度に寄与する言語的特徴は限定的であった。統計分析の結果、用例内のA1レベルの単語数、統語構造の深さ、用例に含まれる名詞の数、用例の平均文法レベル、そして用例内に含まれるA2.2レベルの文法構造の数が例文難易度に寄与する変数として特定された。一部の特微量を除き、これらの基準言語特性は順序ロジスティック回帰モデルでCEFRレベルの上昇に対し正の係数となり、レベル上昇の特微量として有効であることが示された。

第6章では、第5章で取り上げたインベントリーに収容された例文が実際のユーザーに与えられた際にどうなるかを実験的に調査した。その意図は、専門家によって作成されたCEFRインベントリーは難易度に寄与する特徴について重要な知見を提供している一方で、学習者がこれらの例文の難易度をどのように受容するかについては、必ずしもインベントリーが規定する難易度レベルと一致しているとは限らないからである。そのため、*Core Inventory*と*Global Scale of English*をとりあげ、学習者が感じる難易度レベルを調査した。ここでは学習者が感じる例文難易度を和訳の正確度と操作的定義を行い、この学習者が感じる難易度レベルとインベントリーで規定・付与されている例文の難易度レベルに相関があるかどうか、ラッシュ分析で調査した（[Criteria Linguistic Properties] × [USER] ↔ [USER]）。ラッシュ分析の結果、学習者が感じる難易度は一般にインベントリーの例文の注釈付けされた難易度レベルと一致する傾向が確認できた。ラッシュ分析によって決定されたアイテムの難易度順と相関が見られた言語特徴は、A2レベル、B2レベル、固有名詞の有無、および構文特性の深さや例文の長さなどの特徴であった。さらに、質的分析は、注釈付けされた言語特性以外にも、学習者の例文の受容難易度レベルに寄与する言語特性が他にもあることを明らかにした。それらには動詞の時制や多義語などが含まれていた。

第7章では、4章から6章までで明らかとなった例文の質に寄与する言語的特徴に着目し、統合的に例文使用の観察調査を行った。ここでは、基準言語特性として6つの変数（句例 vs 文例、用例の長さ、用例内での見出し語の位置、用例内の難語の有無、用例の文法構造）、例文提供インターフェイスに関わる特徴として5つの変数（用例数、提示順、文法コードの有無、日本語訳の有無、提示方法（KWIC vs. 文提示））を取り上げ、これらの変数が日本人英語学習者の辞書使用に与える影響を統合的に観察した。観察タスクとして、与えられた辞書情報をもとに、英文完成タスク、エラー修正タスク、和文英訳タスクの

3種類の産出タスクを行った。この際、学習者の認知プロセスを確認するため、誘出方法として思考発話法を用いた。また、提供する辞書情報は、上記の基準言語特性と例文提供インターフェイスの変数の影響が確認できるように例文セットを作成し、セット別に学習者の遂行状況を観察した。観察の結果、基準言語特性・インターフェイスに関わる変数間で、例文使用の難易度に対して相互に複雑な影響が見られた。

第8章は、この論文のために行われた4-7章の個別研究の結果を考察しつつ、3章で提示した「例文の使用と評価のモデル」を更新し、例文とその評価基準の役割をより確固たる理論的枠組みの中に位置づけることを目指した。その中で、本研究が方法論的には混合研究法（mixed method）の手法を用いて辞書例文の目的・条件・評価基準の体系化を試みた点、理論的には辞書学・自然言語処理などの諸分野における例文研究に一定の理論的な枠組を提案した点、教育的には特に目的別・対象ユーザー別の例文のあり方を明確にし、それに基づくより有効な例文作成・選定の実際的な方法の提案に道を拓いた。特に辞書編纂の分野でレベル制御された例文を提示するインターフェイスの改善などの可能性を論じた。

キーワード：例文、例文評価、CEFR、基準言語特性、ユーザー研究、学習辞典、CEFR インベントリー